

子どもの「考え」に着目した生活科学習指導に関する一考察
—第4期教育振興基本計画との関連から授業実践を見つめる—
A Study on the Living Environment Studies Class
Focusing on Children's "Thoughts"

石井 健作

福岡女学院大学 教職支援センター
教育実践研究 第8号 抜刷

(2024年3月)

子どもの「考え」に着目した生活科学習指導に関する一考察 —第4期教育振興基本計画との関連から授業実践を見つめる— A Study on the Living Environment Studies Class Focusing on Children's "Thoughts"

石井 健作

1 はじめに

2023年6月に閣議決定された「第4期教育振興基本計画」¹⁾では、2040年以降の社会を見据えた教育政策におけるコンセプトとも言えるべき総括的な基本方針として「持続可能な社会の創り手の育成」及び「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」が掲げられた。持続可能な社会の実現に向けては、一人一人が自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓くことが重要であるとされている。これは、令和の日本型学校教育²⁾で目指している「個別最適な学び」と「協働的な学び」を通して具現化するものであり、特に、子ども一人一人の学びを保障するために、子どもがどんな「考え」をもち、どのように高めていくかという面から考える必要がある。

幼児教育から高等学校教育の円滑な「縦のつながり」³⁾の要となる教科である生活科は、幼児教育からの接続期にどのように子どもが「考え」をつくり、それを深めながら、自分の良さに繋いでいくかが鍵となる。ここで、新しい教育振興基本計画が広く示されたこの期に、生活科の教科のねらいと照らし合わせながら、子どもの「考え」に着目した授業実践を考察していくことは重要である。

2 第4期教育振興基本計画の整理と生活科

前述の通り、第4期教育振興基本計画では、「持続可能な社会の創り手の育成」及び「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」を基本コンセプトとして挙げている。ここでは、それぞれについて読み深め、生活科との関連について述べていきたい。

(1) 「持続可能な社会の創り手の育成」の視点と生活科との関連

教育振興基本計画の中の総括的な基本方針・コンセプトの中で、持続可能な社会の創り手の育成に関して、以下のように述べられている。

こうした社会の実現に向けては、一人一人が自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、「持続可能な社会の創り手」になることを目指すという考え方が重要である。将来の予測が困難な時代において、未来に向けて自らが社会の創り手となり、課題解決などを通じて、持続可能な社会を維持・発展させていくことが求められる。

一方、現行の小学校学習指導要領解説生活編では、教科の目標の最終的な到達点として、「自立し生活を豊かにしていくための資質・能力の育成」⁴⁾が求められている。この「自立し生活を豊かにしていくこと」について、解説の中では「自立」を、「学習上の自立」と「生活上の自立」、そして「精神上的自立」の3点から述べており、以下のように整理される。

Table.1 生活科の「自立」の整理

学習上の自立	自分にとって興味・関心があり、価値があると感じられる学習活動を自ら進んで行うことができるということであり、自分の思いや考えなどを適切な方法で表現できるということ
生活上の自立	生活上に必要な習慣や技能を身に付けて、身近な人々、社会及び自然と適切に関わることができるようになり、自らよりよい生活を創り出していくことができるということ
精神上的自立	上述したような自立へと向かいながら、自分のよさや可能性に気づき、意欲や自信をもつことによって、現在及び将来における自分自身の在り方を求めていくことができるということ

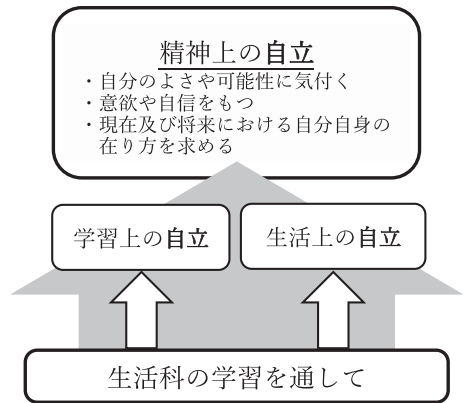


Fig.1 3つの「自立」の関連

つまり、最終的な自立は「精神上的自立」である。これは、「一人一人が自分のよさや可能性を認識すること」と重なり、更には、「豊かな人生を切り拓くこと」にも繋がるものである。上記のことからも生活科でねらうことが、「持続可能な社会の創り手の育成」に関連していることは疑いの余地はない。

(2) 「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」の視点と生活科の関連

教育振興基本計画の中で、「ウェルビーイング」⁵⁾については、以下のように定義している。

身体的・精神的・社会的に良い状態にあることをいい、短期的な幸福のみならず、生きが

いや人生の意義など将来にわたる持続的な幸福を含むものである。また、個人のみならず、個人を取り巻く場や地域、社会が持続的に良い状態であることを含む包括的な概念である。

特に、日本社会に根差したウェルビーイングの要素としては、「幸福感（現在と将来、自分と周りの他者）」、「学校や地域でのつながり」、「協働性」、「利他性」、「多様性への理解」、「サポートを受けられる環境」、「社会貢献意識」、「自己肯定感」、「自己実現（達成感、キャリア意識など）」、「心身の健康」、「安全・安心な環境」等が挙げられている。

その上に立って、教育振興基本計画の同じコンセプトの中では、日本社会に根差したウェルビーイングの向上に関しては、以下のように述べられている。

ウェルビーイングの実現とは、多様な個人それぞれが幸せや生きがいを感じるとともに、地域や社会が幸せや豊かさを感じられるものとなることであり、教育を通じて日本社会に根差したウェルビーイングの向上を図っていくことが求められる。

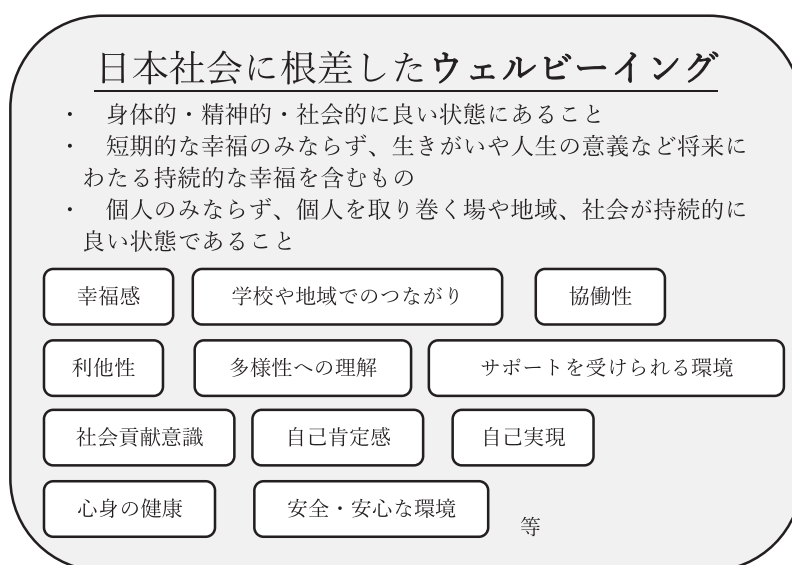


Fig.2 日本社会に根差したウェルビーイングの構成要素

一方、現行の学習指導要領解説生活編には、教科の目標の最終的な到達点の「生活を豊かにしていくこと」について、以下のように述べている。

生活科の学びを実生活に生かし、よりよい生活を創造していくことである。（中略）ここでいう豊かとは、自分の成長とともに周囲との関わりやその多様性が増すことであり、一つ

一つの関わりが深まっていくことである。そして、自分自身や身近な人々、社会及び自然が一層大切な存在になって、日々の生活が楽しく充実したり、夢や希望が膨らんだりすることである。

この内容は、まさに現在の教育が求めている「日本社会に根差したウェルビーイング」の姿そのものであり、生活科の学習を通して、生活を豊かにしていく資質・能力を育成することが、「日本社会に根差したウェルビーイング」を向上させ、それを実現していくことに繋がると考える。

3 教育振興基本計画の視点に立った授業実践を見つめる

以上のことを踏まえ、生活科の学習指導は、「精神上の自立」と「日本社会に根差したウェルビーイング」の視点をもとに行っていくことが大切であると考え。そこで、筆者が2022年度から校内研究^①に関わっている福岡市立東若久小学校の生活科部の研究主題と授業実践について、どのような視点で分析すると良いかを考えることとする。

(1) 研究主題

東若久小学校では、2023年度は以下のような生活科部研究主題を設定し、実践を重ねている。

子どもの考えを深める生活科学習指導 ～単元構成の工夫を通して～

(2) 研究仮説

生活科において、単元構成の工夫を適切に行えば、子どもは自分の考えを強化（より確かにする）・発展（より進んだ段階に高める）させることができるだろう。

(3) 研究の内容

- 単元全体を「であう段階」「ひたる段階」「ひろげる段階」の3段階に分ける。
- 各段階のねらいを整理し、ねらいを達成するための手立てを工夫する。

Table. 2 各段階のねらいと手立ての整理

	各段階のねらい	主な手立て
であう 段階	単元の学習を進めるに当たって必要となる最低限の生活習慣や技能、学習の中心となる考えやこつを、共通体験を通して経験させる。	・仕組みが単純で試行と結果の関連性が明確で達成感・成就感を得られやすいものを精選して、共通体験として位置づける。
ひたる 段階	活動を通して見つけたことを比べ・例え・試し・見通し・工夫・改善し、表現しながら気づきを確かなものにする。	・インタビュー先の商店や施設の画像や動画を精選する。 ・様々な視点から考えさせるために、同質・異質グループでの交流の場を設定する。
ひろげる 段階	異なる方向のめあてをもって追究していた友達との交流を行い、学習全体を振り返る。	・であう段階での見方や考え方を明確にしたことで、この段階で自分の考えを深めることができたことを確認する場を設定する。

5 実践の概要とフィードバック

以上の研究主題をもとに、2023年度は2度の研究授業（全体研修授業：第1学年、部内研修授業：第2学年）を行い、研究内容を検証してきた。今回は、部内研究授業として行われた第2学年の木橋七海先生の実践（第10時）を中心に紹介する。

（1）実施日 2023年11月上旬

（2）学年 第2学年

（3）指導者 教諭 木橋七海 先生

（4）単元名 「どきどきわくわくまちたんけん」⁷⁾「もっとなかよしまちたんけん」⁸⁾

（5）学習指導要領での指導内容

（3）地域に関わる活動を通して、地域の場所やそこで生活したり働いたりしている人々について考えることができ、自分たちの生活は様々な人や場所と関わっていることが分かり、それらに親しみや愛着をもち、適切に接したり安全に生活したりしようとする。

(6) 主な単元計画

Table.3 本実践における単元構成

「どきどきわくわくまちたんけん」

段階	配時	学習活動
であう	3 ③	【共通体験】 1 東若久校区のまち探検をする。 核となる気づき 「東若久校区っていいな。」

「もっとなかよしまちたんけん」



	1 ①	2 まち探検を振り返り、単元のめあてをつくる。 単元のめあて 東若久校区のよさを見つけよう。
ひたる	4 ① ① ① ①	【追共通体験】 3 公民館に行き、見学をする。 4 見学したことを基に、もっと知りたいことを考える。 5 施設の人に『インタビュー』する。 6 公民館で見学やインタビューして分かったことを4つの視点でまとめる。 広がった気づき 「習い事をするところがあっていいな。たくさんの人が利用できていいな。たくさん本があっていいな。みんなに喜んでもらうために一生懸命に働いている館長さんがいていいな。楽しそうなイベントがあっていいな。」
ひろげる	7 ① ① ① ① ① ①	7 どの施設やお店に行ってインタビューするのかグループ分けをする。 8 公民館について、もっとくわしく知るためには、どんな質問がよかったのか考えながら、施設やお店についての質問を考える。 ・グループで質問を考える。他のグループの質問を聞いて、自分達の質問を付加修正する。 9 インタビューする際の注意事項を確認する。 10 施設やお店で見学、インタビューをする。 11 追共通体験に立ち返りながら、分かったことについてまとめをする。 12 グループごとの発表を聞いて、学習全体を振り返る。 さらに広がった気づき 「東若久小校区っていいな。なんでかというとな、地域の人のためにお店を開いているからだよ。おいしい野菜をたくさん売っているからだよ。色んなはちみつを売っているからだよ。(今度買いにいつてみたいな。)僕達を守ってくれているから、安心して生活ができるからだよ。(僕も消防士になってみたいな。)いろんなメガネをたくさん売っているからだよ。病気になっても治してくれる先生がいるからだよ。」

(7) 本時目標

- 公民館での追共通体験を生かして、地域で生活したり働いたりしている人や場所のよさを知るための質問を考えることができる。

【思考力・判断力・表現力等の基礎】

(8) 本時で子どもが生かす具体的な見方・考え方

子ども達が生かす見方：身近な生活を捉える視点

- ・ 公民館の設備、働いている人、仕事、利用している人、自分との関わり

子ども達が生かす考え方：自分の生活において思いや願いを実現する

- ・ 公民館での質問をもとに、店や施設についてより詳しく知ることができる質問を考える。
- ・ 他のグループの質問と自分のグループの質問を比べながら付加・修正する。

(9) 本時の展開 (10/15) 2023年11月上旬 場所 教室

Table. 4 本実践における本時の展開

学習活動と内容	指導及び支援 (○)・主要発問 (「」)
1 本時のめあてを確認する。 めあて お店やしせつではたらいっている人や場所のよさがわかるしつもんを考えよう。	○ 話し合いを円滑に行うために、町探検グループごとに分かれて行う。
2 お店や施設で働く人にインタビューをする質問を考える。 (1) 個人で質問を考える。 (2) グループごとに質問を考える。 (3) 全体で質問を交流する。 ・ 青果店・歯科・保育園・消防署 ・ 内科小児科医院・蜂蜜店・花屋・メガネ店 (4) グループごとに質問を考える。	○ 公民館のよさを知るための質問や答えを見つけるには、どのような質問をすればよかったのかをスライドを見ながら想起させる。 ○ 視点を明確にし、考え易くするために、4つの視点を色分けし、4色の付箋を使い考えさせる。 思 公民館での追共通体験を生かして、お店や施設について、よさを知ることができる質問を考えることができる。
3 今日の学びを書き、次時への見通しを立てる。	○ いいなと思った質問を付箋に書いて交流用シートに貼り足したり、いらなと思った質問の付箋を取ったりさせる。 ○ 今日の学びの観点を示す。 お店や施設で働く人や場所のよさがわかる質問を考えることができたかと思うか。

(10) 公開授業に対する石井からのフィードバック (2023年11月9日付) 一部抜粋

I 部研授業を拝見して

本時に生かす見方について

- ・ 追共通体験（公民館）の質問を振り返り、4つの視点を子ども自身がしっかりと理解していた。初めに、先生が「公民館でインタビューして、『もの』、それから？」と尋ねると、学級の中の多くの子どもが「働いている人」「仕事」「利用する人」と自信をもって発言しました。

このことから、子どもが4つの視点（本時に生かす見方）をきちんと意識し、理解したことが分かりました。(Fig. 3)

- ・ 見方を生かしながら質問を考える場面が見られました。「S せいかグループ（以下 SG）」の U さんは、質問を考える時間になると、まずは、自分が記録していたノートを取り出しました。そして、その中から、「もの」に関わるものに目を付け、すぐにプリントの一番上の欄に、「どこからやさいはくるんですか」と、視点を明確にした質問を書くことができていました。書き終わるとすぐに、今度は一番下の枠に「一日に何人ぐらいきますか」と書き足しました。どの枠にどんな質問を書いたらいいかが明確だったことが伝わってきました。同様に、SG の子ども達全てが、ノートを参考に休む間もないくらい次々にプリントに書いていました。(Fig. 4)

本時に生かす考え方について

- ・ 交流の際にお店や施設を詳しく知る質問を考える（話し合う）姿が見られました。個人作業の次は、グループでの交流でしたが、SG は自分の質問を次々に付箋に書き出し、交流し始めました。その際に同じような内容を書いた質問（付箋）についての議論となり、「これは同じことと言っている」と仲間分けを始めました。また、それを比べて、「こっちの質問の方がいいんじゃない？」と、より良い質問を選ぼうと話し合う姿が見られました。(Fig. 5) こっちの方がお店のことが良く分かるという視点でした。この姿は、まさに良い質問をしたいという思いが表れた姿だと思います。

一方、他のグループとの交流後には、あまり付加・修正が見られなかったかなと思います。それは、調べる対象(施設やお店)が違うので、一度質問を考えると、その視点を変えにくかったのが一つの理由として考えられるのかなと感じました。自分の施設やお店に拘っているからこそその姿でしょう。一度執着すると、なかなか考えを変更するのは難しそうです。そこには、交流の場を単に設定するだけでなく、視点を変えるためのより具体的な手立てがあるかもしれません。

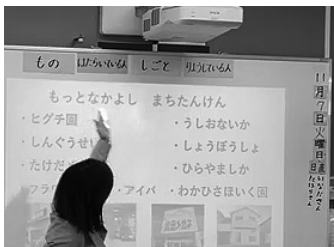


Fig. 3 4つの視点の意識化



Fig. 4 質問を考える児童



Fig. 5 質問について話し合う児童

本時の手立てについて

① 前時の振り返りについて

子ども達が次々に内容を振り返る発言をしていたことから、しっかりと学び、また、この振り返りの掲示や時間があるからこそ、追共通体験が意識されるのだなと思いました。(Fig. 6) あとは、振り返ったことを導入段階だけでなく、本時の中で常に意識できるようにしてみてもいいかなと思いました。木橋先生は大変上手でした。(Fig. 7) 交流の中でも「公民館の・・・」と発言している場面が何度かありました。それが子どもの口から出るようになれば最高です。子どもが横に掲示してある前時までの質問や回答を参考にできる手立てが後一押しあった気がします。今後私も一緒に考えてみたいです。

② 写真などについて

今回の写真は、子どもが聞きたいことの視点を整理する上で、大変有効な手立てだと思いました。また、PCを用いたので、画像だけでなく、動画も見ることができます。(Fig. 8) 素晴らしい手立てです。ただし、今回のPC上の画像だと、一枚ずつしか見ることはできません。前に見た写真の記憶が曖昧になることがあるのかなと感じました。写真を並べて比べてみると違った反応があったかもしれません。小さいものでいいので手元に印刷した写真があればいいかなと思いました。一枚のプリントにして渡してもいいかもしれません。また、協議の際にも話題に挙がりましたが、それぞれの写真が意味する視点（もの、働く人、仕事、利用する人）のどれかをひと目で分かりやすくすることも大切かなと思いました。例えば、色付きの縁を付けることで、教師がどんな視点で見てほしいかが明らかになると思います。見方や考え方を生かすための手立てと考えるならば、それを更に意識したひと工夫を更に考えてみたいと思いました。

③ 3回の交流活動について

交流活動を仕組んだことは、考えた質問を付加・修正するために大切なことだったと思います。その中で2つのことを考えました。

1つ目は、3回の交流の軽重（優位性）です。今回の交流では、どの交流が一番大切だったのかと考えてみました。私は3回目の交流だったと思います。それは、考えた質問がこの1時間の中で徐々に高まっていき、最後により質の高い質問になるべきであろうと考えたからです。他のグループの質問を聞いて、「自分とのつながり」がより分かる質問はどれかなと考える場面が本時の一番大切なところだと思いました。よって、私だったら最後のグループ内の交流を重視するのかなと考えます。45分間と時間は限られていますので、そこに重点を置くのであれば、他のところを簡略化しないといけません。初めのグループ交流は個人活動をなくして初めから交流させる、または、全体交流は出し合いで良かったのでフラッシュカードに書かせてから黒板に貼らせる等の工夫を考えてみました。

2つ目は、交流の際には場の設置だけでなく、その際の手立てが必要かなと思いました。初めてのシートと付箋は大きな手立てとなっていました。(Fig. 9) その後の交流の手立ても何かあったのではと考えてみました。例えば、作成したシートから「自分とのつながり」をより考えられそうな質問にはシールを貼るや、教師が視点を絞る発問を行うなどです。交流活動は、協働的な学びの観点からも重要ですが、その際にどんな手立てを打つかが1つのポイントとなります。交流活動を仕組んだことが手立てではなく、交流の際にどんな手立てを打つかを考えてみるというかと思います。



Fig. 6 前時の振り返りの掲示



Fig. 7 振り返りをする教師



Fig. 8 PCの写真から考える児童



Fig. 9 付箋を貼った交流ボード

II 板書から

授業後に板書を見ると、その授業の良かった点や改善点が明確になると考えています。

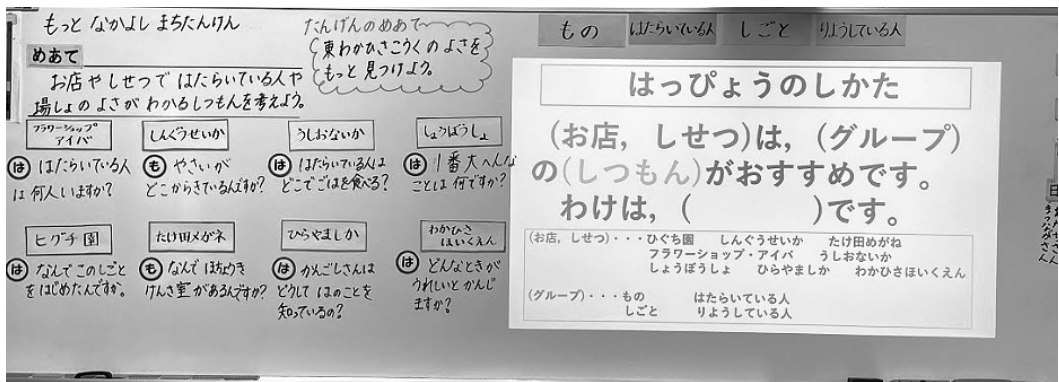


Fig. 10 本時の板書

- 4つの視点によって色分けされ、どんな質問を考えたか明確になっていました。この色分けは、横に掲示されてあった前回までの流れ図でも統一されていました。単元を通して、子ども達が意識して考えてきたことが分かります。
- 単元のめあてが板書の中に書かれ、意識させたいことが分かります。この記述があることで、本時の学習が単元の中の一部であり、最終的に何を目指すかが明確になっていたと思います。生活科では、単元全体を見通すことを大切にしていきたいものです。
- 「発表の仕方」を画面で提示してあるのはいいですね。今回はPCの画面を映しましたが、

これはこの時間だけでなく単元の他の時間や、もしかすると他の教科の際にも利用、応用できる内容かもしれません。発表の仕方、話し方等の表現力は国語の時間だけではなく、教育活動全体を通して力をつけたいものです。積み上げを図る上でも、繰り返し提示することは重要なことだと考えます。

- 地域とのつながりをより考えさせるためにも、写真やイラスト等があってもいいかと思います。す。例えば、働いている方の写真があれば、子ども達もその人を意識して質問を考えるのではないのでしょうか。または、施設やお店の特徴が分かるものが前面に一つでも提示してあると、自分とのつながりがイメージしやすいのかなと思いました。

Ⅲ 全体を通しての感想

木橋先生、部研授業、大変お疲れ様でした。笑顔が素敵な先生ですね。先生がこの半年余りで学ばれたものをしっかりと発揮し、また、先生らしさが表れた素晴らしい授業でした。同学年、生活科部の先生方と協働的に教材研究をなされ、本日に臨まれていたことが、授業開始時の先生の自信のある姿から伝わってきました。また、昨年度から研究授業として実践されている本単元ですが、ブラッシュアップされた授業になり、東若久小の先生方の授業にかける思いが伝わってきました。

毎回、先生方の授業を見せていただくたびに、現場はいいな、素敵だなと思っています。生きた実践、思いの詰まった実践、子どもの真剣な眼差しがある実践が東若久小にはあります。是非、今後も目の前の子ども達のため、日本の教育のために実践を積み上げていただきたいと思います。一方で、教員というのは他の職以上に激務です。ご無理をなされないように、まずは、ご自愛されてください。

今年度も1年間、たくさん学ばせていただきました。有難う御座いました。

6 授業実践の成果と今後の展望

東若久小学校の研究主題及び授業実践において、第4期教育振興基本計画と照らし合わせて、以下のことが成果として挙げられる。

(1) 「持続可能な社会の創り手の育成」の視点から

- ・「自立」の視点からの学びが展開された。子ども達は、自分たちが調べる店や施設について、公民館での追共通体験をもとに、その際の見方・考え方を生かしながら、自分なりの質問を個人での「考え」を持つことができ、また、話し合いで「考え」を高めることができた。

今までの多くの生活科の実践では、質問内容については教師が与えた視点で話し合うことが多かったであろう。しかし、今回は、子ども達が自分たちの体験（共通体験及び追共通体験）

を生かして、学習を進めることができている。これはまさに「学習上の自立」の姿である。しかも、今回は地域学習を通して、自分のよさや可能性に気づき、意欲や自信をもつこともでき、ひいては、地域社会における自分自身の在り方についても考える学習となっている。このことは、「精神上の自立」である。地域学習において、共通体験をもとに学習を進めることは、「精神上の自立」へと繋がると考える。

（２）「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」の視点から

- ・ 本単元の学習を通して、社会的な関わりの良さに気づき、地域社会における生きがいや人生の意義などについての「考え」を持つことができた。

この姿は、まさに「ウェルビーイング」を獲得している姿であると考えられる。子どもたちは、自分たちが住む地域社会の構成者が、自分を含めすべての地域住民のために働いていることを学習を通して気付く（考える）ことができている。「ウェルビーイング」の構成要素の中でも、特に「学校や地域でのつながり」や「利他性」、「社会貢献意識」、「安全・安心な環境」等は本単元で子どもたちが感じたことである。子どもたちが商店や施設で働く人々の姿について調べ、気付いていくことで、多様な個人それぞれが幸せや生きがいを感じるとともに、地域や社会が幸せや豊かさを感じられるものとなるという教育振興基本計画のコンセプトを具現化したものとなった。本単元の指導で、単に活動させるだけでなく、「考え」に着目して授業実践を行ったことで、それが顕著となったことは明らかである。今後も、ウェルビーイングの視点からの生活科の授業分析を行っていきたい。

一方、本実践を通して、東若久小学校には、以下のような今後の展望を提案している。

- テーマの「考えを深める」という表現が、生活科、また本校の研究により沿った表現として、どんな表現がいいかを考えてみること

生活科では、「考え」よりも「気づき」と表現することが多い。勿論「考え方」という言葉があるように、生活科でも「考え」ることはある。また、資質・能力の２つ目（思考力・判断力・表現力等の基礎）には「身近な人々、社会及び自然を自分との関わりで捉え、自分自身や自分の生活について考え、表現すること」と記されていることから、考える場面は必要である。しかし、その際に子どもが得られるのは「考え」ではなく、目の前の対象に関しての「気づき」である。「青果店は〇〇を売っているんだ」や「〇〇さんは、僕たちのために色々なことをしてくれているんだ」等は、「考え」ではなく、「気づき」であろう。そこで、「考え」について再度検討することとする。東若久小学校では「生かす考え方」を「自分の生活において思いや願いを実現していくこと」と定義している。となると、「考え」は「〇〇したい」という「思

いや願い」ではないだろうか。以上を踏まえ、著者から全体主題と関連を考え、生活科部の研究主題を以下のようにしてはどうかと提案した。

現在の東若久の生活科部のテーマ

- 子どもの考えを深める生活科学学習指導 ～単元構成の工夫を通して～

石井の代案（主題のみ）

- 子ども自らが気づきを広げる生活科学学習指導 ←「核となる気づき」が広がるという立場
- 子ども自らが気づきの質を高める生活科学学習指導 ←生活科の伝統的な「気づきの質の高まり」そして、全体主題の「考え」という立場を重視して、生活科の「思いや願い」に置き換えて
- 子ども自らが思いや願いを実現する生活科学学習指導

最後になりましたが、本稿にご協力をいただくと共に、昨年度から引き続き協働的に研究を進めていただいた福岡市立東若久小学校の荒木信行校長先生、研究主任の磯永港太先生、授業者の木橋七海先生、第2学年の川崎亘先生、上原陸先生をはじめ、東若久小学校の教職員の皆様に感謝申し上げます。

<参考文献>

- 1) 文部科学省「第4期教育振興基本計画」pp. 1-10、2023
- 2) 中央教育審議会「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）」pp. 15-21、2021
- 3) 斎藤博伸「園から高等学校 学びを滑らかに接続する」生活科・総合的学習ブックレット、第17号、pp. 2-4、日本生活科・総合的学習教育学会、2021
- 4) 文部科学省「小学校学習指導要領解説 生活編」pp. 8-12、東洋館出版社、2017
- 5) 「ウェルビーイング」の一般的な解説については、例えば以下のようなものがある。 前野隆司、前野マドカ「ウェルビーイング」日経文庫、2022
- 6) 福岡市立東若久小学校「令和4年度 テーマ研究集録」、2023
- 7) 児童用教科用図書「あしたへジャンプ 新しい生活（下）」東京書籍、pp. 23-32、2020
- 8) 上掲書7) pp. 71-80

